



献上桃の選果には、スマイルピーチも参加し、町をあげて桃の魅力を発信している。



安全・安心な果物の生産に向け、農地除染(果樹)を実施。



平成 26 年、石原伸晃環境大臣(前列中央)が桑折町を訪問。



そば打ち実演を熱心に見学する子どもたち。



町に広がるそば畑。半田銀山そばの会で栽培し、刈り取りを行っている。

桑折町の新たなブランド

「明日への願いを込めて」

伝統の「半田銀山そば」を復活

桑折町の魅力を発信するために、町では新たな動きが生まれています。その一つが「半田銀山そば」です。その昔、銀が採掘されていた半田山の麓野にはあまり肥料を必要としないそば畑があり、かつて夕食は、ほとんどそば料理が食べられていました。その伝統を復活しようと平成24年1月に発足した「半田銀山そばの会」では、東日本大震災の風評被害や農作物のイメージ打開をめざし、そば栽培とそば打ちの実践



そばの郷土料理「そばでんちん」。でんちんは「で〜ちん」こねるとい意味で、手早くこねて延ばして短く切って煮込む料理です。



「郷土の名物料理をぜひ皆さんに食べてほしい」と語る半田銀山そばの会 会長の氏家浩さん



を行ってきました。平成24年には「半田銀山そば」を商標登録(そばでは県内2番目)。そして平成26年6月からは「銀そばを食べる会」を毎月開催しています。会長の氏家浩さんは「銀そばを新たな名物として沢山のの人に食べてもらいたい」と意気込みます。同年11月にはイベントにも参加し、うちたての幅広そばを煮込んだ桑折町の郷土料理「そばでんちん」を販売、汗だくで完売し「おいしく食べてあげたい」と、満腹感がある」と評判も上々でした。そばの会ではますます活動を進め、地域活性化をめざして桑折町を元気にしていきます。

日本酒「辛口桑折」を完成

もう一つの新名物が、日本酒「辛口桑折」です。企画した「桑折醸造会」では、町を元気づけるため原料はあくまで「桑折産」にこだわりました。酒米「夢の香」は、町内の農業法人に生産を委託、水は町自慢のおいしい天然水「香村金剛水」を使い、真正正銘の地元ブランドの酒を醸成させました。醸造は喜多方市の蔵元に依頼。完成した酒は会長の鈴木清幸さんは「飲み口が良く、スッキリとしたおいしい酒ができたと手ごたえを感じました。」「辛口桑



原料をすべて町内産にこだわった「辛口桑折」 「地元ブランドのお酒をぜひどうぞ」と語る桑折醸造会会長の鈴木清幸さん

折」は、平成25年12月に販売を開始し、なんと一週間で完売という予想をはるかに上回る売れ行きに驚き、喜んでいきます。この「辛口桑折」は、「町に元気を」という願いでつくられたことから、町内のみ販売に限定されています。中には「お酒を買う」ことが、町を訪れるきっかけになればいい、という醸造会メンバーの思いも込められています。「町民の心」までは被ばくさせられない。だから、辛口桑折を突破口に町をもっと元気にしていきたいと思っています」と鈴木会長は語ります。

桑から桃へ、町の誇りを継承

桑折ブランドの桃づくりは、かつて町の養蚕を支えた桑の木を伐採し、そこに桃の木を植えることから始まりました。「桑と桃は、栽培条件がとも近かつたことが幸いしました」と桃農家の佐藤秀雄さんは語ります。

かつて全国に名だたる製糸工場があった桑折町。桑園や養蚕技術の改良で生糸の生産を支え、全国に桑折の名とどろかせた、という誇りが町民にはあられました。その養蚕業が衰え、自信を失いかけた時に、町の農家はも一度立ち上がったのです。当初「れ13号」という番号で呼ばれて栽培された桃には「あかつき」という名が付き、福島の有名なブランドとして定着しました。糖度、形・色・おしさ、すべてにおいて全国に誇る品質の桃です。このあかつきは平成6年に降連続して、「天皇家・宮家への献上桃」という大役を果たしてもいます。



これほどまでに桃畑が広がっているのは、日本のどこにもない。本当に恵まれた肥沃なこの農地を活かしていきたい、と語る親さん。

桃の魅力をも未来へ

「最高の味を人々にお届け」

震災、高齢化を越えて未来へ

桑から桃への転換によって、町は全国への誇りを取り戻しました。しかし、東日本大震災・原発事故が発生し、桑折の桃も風評被害に悩まされます。秀雄さんの息子、親さんもその一人で、震災前までの桃は順調でしたが、震災後は苦しい経営を強いられています。また震災によって農家の高齢化・後継者問題が加速度的に進み、町では畑を止める人なども増えきました。それらの畑への対応も町の大きな課題です。しかし、親さんは悲観していません。明るい未来を見据えています。

つづける喜び、町の誇りをつなぐ

「震災後、町に避難してきた方や、志のある若者が農家に新規参入するケースが、少しずつ増えている。桑折の親さんはやる気のある人なら、桑折の桃の品質を継いでいくのは誰でもいい。外の人があくると活気も出ます」と語ります。もちろん、いろんな人の力を借りるとなる、仕事がある程度マニュアル化



佐藤秀雄さん 親さん 日々農業を営む。昭和50年に桑畑の桑の木をすべて伐採して、桃に完全に切り替えた。秀雄さんは小学校で子どもたちに農業体験をしてもうら活動もしている。長男の親さんは「桑折は全国的に見ても本当に恵まれた肥沃な土地だ。これを活かさないのは本当にもったいない」と語り、未来へ農業のバトンをつなぐと奮闘している。

